セクシーコマンドーはありふれているのだろうか

桐原

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ありふれた職業とセクシーコマンドー外伝　すごいよ!!マサルさんのクロスオーバー

「打ち込めるものがやっと見つかった」

これは前世で無気力だったが転生後にマサルさんに出会い、セクシーコマンドーに心を打たれて、学び、布教していく話。

ついでに異世界召喚に巻きこまれる。

目次

次世代のセクシーコマンドー

第一話 ―― 1
第二話 ―― 12
第三話 ―― 22
第四話 ―― 33
第五話 ―― 45

次世代のセクシーコマンドー
第一話

この出会いを俺は忘れない
死ぬ間際でさえ、何かに熱く成れない自分が悲しかった、悔しかった。
もしも来世があるなら、心から熱く成れるものに出会って、それに打ち込みたい。
ああ、もう目の前が霞んで……

それが前世の最後の記憶、来世というもの実在したが未だに心から熱く成れるものとは出会えていない、まあ、まだ小学生にもなっていないけど。
そんなことを思いながら、見慣れた町を散歩するがやはり何か心を揺らすようなものは無い、いつも通りの代わり映えのしない風景があるだけで、せいぜい昨日は曇りだったが今日は晴れといった違いくらいか。
（もう、帰ろうかな）

そう思い始めた時、偶然風に乗って声が聞こえてきた。
『おいおい、何ぶつかってんだよ、オッサン』
『いやーすまない、ちょっと浮かれていてね』
『浮かれていてじゃないんだよ！どう落とし前つけてくれんだよ、ああッ!?』
どうやら誰か不良に絡まれているらしい、普通ならこの場から離れて見て見ぬふり（この場合は聞いて聞かないふりだろうか）をするのだが、何故かこの時は見に行くべきだと思った。
結果的にこれは正解で、前世から求めていた『心から熱く成れるもの』との出会いであったのだ。
そこには肩に不思議な物体を付けている前髪が妙に長い変な大人といかにも不良と分かるガタイの良い高校生の二人組がいて、
『ハァァァァァ』
と、独特な手の動きでチャックを下ろす変な大人（以下、変人）。
慄く、不良たち。
そして、おろされるズボンとあらわになるトランクス。
『フフフ、怖気づいたのかい？』
何故か不敵に笑う変人はどこか自信満々だ、確かに目の前でチャックを下げてズボン

を下して何故か自信満々に笑う人がいたら怖気付くだろう。
え？何、そうして不良を追い払うの？
『そんな訳あるか！くたばれッ！』
ところが不良は逃げるどころか激昂して変人に襲い掛かる。
が、華麗なジャンプでひらりと躱す。
『ほおッ――――――!!』
そして、何かを高めるような事をして……くねくねとした動きで不良たちに接近していく。
『『はぁ――?!』』
これには不良もビックリしていた。
いや、俺も唖然としていたよ。
変人はその隙を見逃さず
『今だ！必殺、Ｌｏｖｅ…ｍｅ…ｄｏｏｏ!!』
そう叫ぶと一撃で不良たちを倒した。
その時、自分の中の何かがカチッと嵌ったような感じがした、それは俺が前世から求めていたものだと確信する。
気づいた時には、俺は変人に駆け寄っていた。

『おじさん、さっきのはいったい何ですか?!』
恐らく今世で初めてであろう大声をだして目の前の変人に尋ねた。
変人は俺の大声に少し驚きながらも教えてくれた。
『あれはセクシーコマンドーさ』
『セクシーコマンドー?あれ、どこかで聞いたことがあるような?』
ホントどこかで聞いたことがあるんだけど、どこだっけ?
頭をかしげていると変人は、
『セクシーコマンドーに興味はあるかい?』
と訊いてきた。
その問いに間を入れずに、
『是非、お願いします』
と答えて、頭を下げていた。
普通ならあり得ない、だが理屈では無い何かが「セクシーコマンドー」を学ぶべきだと叫んだ。
『よし、今日から君は僕の弟子だ。僕の名前は花中島マサル、君の名前は?』
『俺…いえ、僕の名前は天空城カナタです。よろしくお願いします、師匠』
これが僕の源流(オリジン)であり、師匠との出会いであったのだ。

時は流れ、十数年後。

□南雲ハジメ

月曜日、それは平日の始まりである。

今日からまた憂鬱な日々が始まるのか、そう思いながら登校して早く家に帰りたいと同時に思った。

いつものように不良（檜山）たちに絡まれて、クラスのマドンナの白崎さんに挨拶されて、クラスカーストの上位陣（天之河グループ）に絡まれていたが、今日は何故かいつもよりも早く担任の先生が来たのだ。

（そういえば、転校生が来るって聞いたことあるような）

生憎、学校に来ても寝てばかりの自分には詳しいことは分からない、せいぜいこれ以上面倒なことにならなければいいなあ、と願うくらいである。

先生が「入って来ていいよ」と言う声で扉が開かれた。

（ん？先生の声が若干震えていたような……？！）

その疑問は直ぐに解消され、今までの眠気が一気に覚める。

『えっ？』

クラスメイトの誰だったかもしれないし、もしかしたら自分だったかもしれない、それ程までにインパクトが強すぎたからだ。

身長は１７０㎝後半、元の学校が学ランだったのか学ラン姿の標準体型の男子。

これだけだと普通に思えるが、肩に付いている一瞬学ランの付属品かな？と思うなんか不思議な物体に、妙にカッコイイヒゲをつけていて、極めつけはアホ毛と思わしきものがレーダー探知機のようにくるくると回っていた。

（（えっ？何これ））

今間違いなく全員がこの転校生についてこう思っているだろう。

いつもなら、ここで不良たちがバカにするようなことを言うのだが、この転校生が放つ妙な威圧感で何も言えない。

「えーと、自己紹介をお願いします」

「はい」

転校生は担任の先生の未だに震えて声に促されて白いチョークを持ち、黒板に字を書き始め、そこには『天空城カナタ』と名前と、わかめ高校という元いた高校と思われる名前があった。

……わかめ高校?!

(えっ?!ギャグとかじゃなくて本気で書いているの?書き間違いとかではなくて?いや、何をどう間違えたら、わかめ高校が出てくる?えっ?本当にそんなふざけた名前の高校があるのか?!)

今自分はスゴイ表情をしていると思う、チラッと周りを見渡したが誰もが困惑した表情を浮かべていて、あっ、やっぱりこれが正しい反応だよねと安心した。

気のせいか、八重さんが一番複雑な顔をしていたので何か知っているのかもしれない。

すると、転校生はスッとこちらを向いて、

「わかめ高校から転校してきました、天空城カナタです。これからよろしくお願いします」

と挨拶してきた。

思いの外普通の挨拶で、安心したがどうしてもヒゲが気になってしょうがない。

そして、わかめ高校って実在する高校なのかということも。
だが、ここで終わらなかった。
「セクシーコマンドー部、通称ヒゲ部で活動していました。この学校でセクシーコマンドー部を設立しようと思いますので部員募集中です」
((……))
頭の中が真っ白になる。
セクシーコマンドー？通称がヒゲ？部活っていたよね、少なくても何かしらの活動ということだから……今なんて言った？
((部をつくるとか言ってなかったか?!))
「そ、それじゃあ席は……」
その瞬間、誰もが思った、頼むから隣に来るなと念じた。
部活のことをすっかり忘れ去ってしまうほど強く。
「……南雲の隣で」
(?·でしょ?!)
バッと先生に視線をやるが、先生は目を伏せて、諦めろといった感じに首を横に振ったのを見て絶望した、お願いだからこれ以上のプレッシャーはいらないよ。
自分でも語彙がおかしくなっているのを感じながら、隣に座った転校生の天空城くん

が、

「これからよろしく！」

笑顔を輝かせて、やあ、というように手を挙げて挨拶してきた。

寝不足だからだろうか、天空城くんのアホ毛もよろしく！といった形をとっているように見えたが幻覚だろう、うん、そうに違いない。

「あ、うん。よろしくね」

この時僕は笑顔で返事ができただろうか、いつもではあり得ないほどの周りの同情した視線が印象に残った。

◇

一時間目　英語

渾身の挨拶をクラスメイト達にした（と本人は思っている）カナタは英語の授業に取り組んでいた、間接疑問文で英文をつくり、ペア同士で発表し合うといったものである。

「えっと、これなんて訳すのかな」

「ああ、これは……」

ホームルームでの自己紹介が強烈すぎて授業でも何かやらかすのではないかと周り、特に席が隣であるハジメは心配していたが普通、いや、優秀だった。

「……つまりはこのように句を分けると…」

「ああ、うん、なるほど」

授業中よく寝ているハジメは勉強があまり得意ではなかったが、とても理解しやすかった。

そう、かなり。

（すごい分かりやすい、もしかしてホームルームでの事は僕が寝ぼけて……いや無いな）

一瞬夢オチだったのか、と期待したがヒゲとまるで生きているように動いているアホ毛を再び見て、これは現実だと再認識する。

その後、昼休みになるまで似たようなことが続き、午前中の授業ではハジメは眠気を全く覚えず真面目に取り組んで、先生たちを軽く驚かせたが隣のカナタの姿を見て納得と同情の視線を貰った。

ハジメは同情の視線はいいからせめてヒゲ（見ている内に付けヒゲだとなんとなく分かった）を外すように言ってくれと心底思うが当然ながら先生方には伝わらず、最早ク

ラスにおいて、カナタ担当はハジメと雰囲気で決定されたのである。

第二話

□天空城カナタ

昼休み。

それは昼食の時間、人によってはその前の休憩時間に昼食を食べる人もいるが。

セクシーコマンドーを布教することも兼ねて隣の席の南雲くんと一緒に昼食を食べようとしたんだけど……

「南雲くん、なんだその食事は」

「え、栄養は摂れているから問題ないよ」

そう言いながら干物ようになったパッケージを見せてくる。

まさか、いつもこうなのかと思いつつも事実確認のために尋ねた。

「今日だけではなくいつもこんな食事を？」

「まあ、うん」

高校生でこれはひどい、よく観察して見ると前世の職場で似たような奴がいたが、この年で仕事をしているとは考えにくいからバイトか何かしているのだろう。

恐らく眠いから昼休みをほとんど睡眠に費やすつもり……完全に昼夜逆転

生活だな、高校にしてはあり得ないほどの何かしらの特技、技能を持っているのだろう。
手を見る限りではプログラマーか漫画家、またはその両方か。
「南雲くん、もしかして君の両親はプログラマーか漫画家なのかい？」
「!?そうだけど、どうして分かったの？」
「いや、知り合いに似たような人達がいてね、フーミンさん、もしくはモエモエさんって人は知っている？」
「父さんと母さんの職場でそんな渾名の人達がいたけど……まさか」
「ああ、フーミンさんのこと藤山起目粒さん、モエモエさんのこと北原ともえさんは二人とも僕の先輩、わかめ高校のＯＢでセクシーコマンドー部の部員だったのさ」
「意外な繋がり?!えっ?!あの人達わかめ高校が出身校でセクシーコマンドーをやっていたの?!」
何やら凄く驚いていたが、こちらもまさか共通の知り合い、しかも師匠と同じわかめ高校セクシーコマンドー部初代部員のメンバー、それも二人も知り合いとは……最早、南雲くんをセクシーコマンドーに誘えという天からのお告げなのかもしれない。
ん？気のせいか教室がさっきよりも静かになったような……気のせいか。
「まあ、フーミンさんは選手だったがモエモエさんはマネージャーだったけど」

「そ、そうなんだ（もしかしたら、モエモエさんはまだまともな可能性が……）」

「そういえば、セクシーコマンドー部の通称がヒゲ部になったのは、モエモエさんの提案だったなぁ」

「……（そんなことなかったか）」

「話が脱線したね、そんな食生活では体力がつかないぞ。何よりプログラマーにしろ、漫画家にしろ、結構な体力が必要だ、それなのにきちんとした食事をしなければ将来に支障が出るぞ」

「うぐ、でもお金とは（趣味に使って）無いし、母さんに頼む訳にはいかないし、勿論僕も料理できないよ」

そう言って目を逸らす様子からこちらが言っていることは理解しているようだ。

ならば、と思い、自分の弁当を机において箸を忘れた時のための割り箸をスッと南雲くんに差し出す。

「食べな」

「え、別に大丈夫だよ、天空城くんの弁当でしょ」

「弁当は二つある。遠慮するな、それに代わりといってはなんだがこの学校のことを色々教えてくれないか」

「(あ、結構食べるんだな)…ありがとう」
最初は遠慮していたものの、お礼言い弁当を食べ始めた。
なんてことのない野菜多めのハンバーグ入り弁当、好評なようで何よりだ。
自分の作ったものが美味しく食べて貰ったのを見て、嬉しく思いながら自分ももう一つの弁当を開けて、ご飯を食べながら考え事をする。
(さて、渾名はどうしようか、『なっくん』が良いか、それともどこからか受信した『ハーレム』が良いか)
「ふむ、南雲くん」
「なんだい天空城くん」
「渾名を付けよう思ったんだけど…」
すると、急にむせたのかゴホゴホとしている、器官にご飯でも入ったのだろうか。
やはり、普段の食事を疎かにしているせいであまり噛むといったことをしなくなったのだろう。
少し心配になってきたので声をかける。
「大丈夫?器官にご飯でも入ったのかい?」
「いや、渾名なんてつけて貰ったことが無かったから驚いて」
「そうなのか!じゃあ、『なっくん』と『ハーレム』のどっちが良い?」

「んんん？『なっくん』は苗字（南雲）から考えたと思うけど、『ハーレム』はいったいどうしたら出てくるの？」

「よく分からないが何かを受信したかのように急に『ハーレム』という単語が浮かんでね」

そう言うと何故か顔を上げて僕の頭の方を見て遠い目をしているが、いったいどうしたんだろうか。

まさか、マッスルの神様のような神様でも見つけたのかもしれない。

これは益々セクシーコマンドー部に入って欲しい逸材だ、早くも部員第一号を見つけてしまったな。

「まあ、流石に『ハーレム』にするわけにもいかないから無難に『なっくん』かな」

「…あ、うん。それでいいよ」

「じゃあ、これからよろしく！なっくん」

こうして昼休みが終わったが、カナタとなっくんは気付いていなかったが彼らの会話の一部始終を観ていたクラスメイト達は色々な事を思った。

とある不良たちは、あいつ大人しくしていただけで実はヤバイ奴だったのか、となっくんに対して恐れを抱いて今後、接触はできるだけ避けようと決める。

とある恋する乙女は、共通の話題かぁ、セクシーコマンドーはなんか怖いけど南雲く

んと一緒になるならセクシーコマンドー部は悪くない選択かも、とカナタにとっては大歓迎、なっくんに対して酷い勘違いをしていた。

とある女剣士は、セクシーコマンドー、天空城カナタ……やはりあいつか、と意味深な思考を巡らせて、南雲ハジメ……まさか彼もセクシーコマンドーの関係者なの？この教室にいたなんて、と友人と同じくなっくんに対して酷い勘違いをしていたりする。

えっ？誰か忘れている？……誰だろう？

ゴホン、次は数学であるが、そこで事件は起こった。

まさかあんなことになるなんて……当時を知る人達は口をそろえて言う、あれは我々が理解できるものではない、そして必ずしも常識は正しい訳ではない、と。

五時間目　数学

「（チラッ）えー、これは……」

「「……」」

「（チラチラッ）そのようにして……」

「「……」」

カナタを除くクラスの生徒たちの目は死んだ魚のようで無心になって黒板の内容をノートに書き写す。

そして、真面目な常識人と学校で有名な数学教師の？橋先生は目をきょろきょろしていた、右前前左後後後一席飛ばして右右左……と。

これはどういうことかというと、アホ毛の移動である。

何を言っているか分からない？それは数学が始まった時刻に遡ろう。

授業開始の鐘の音がなると同時に数学担当の教師である？橋先生が入ってきた。

さあ、授業が始まるというところで？橋先生は気付いた、なんか肩に変な物体とヒゲを付けた学ランの生徒がいることに。

変な物体やヒゲは、大方昼休み中にふざけてつけていたのだろうと思い、

「授業が始まるから肩のやつとヒゲを外しなさい」

そう、カナタに注意した。

（（（正論だぁ―!!!））））

クラスメイト達はこの日、何度目か分からないがまた心を一つにする。

逆に何で午前中の内に他の先生方に注意しなかったのか？なんてことは無い、変な物体は学ランの付属品でヒゲは自前だろうな、だってわかめ高校から転校して来たんだ

し、と納得?していたからだ。
ちなみにわかめ高校のことは高齢の先生方ほどよく知っている。
後にこの回答を聞いた生徒、若い先生方はわかめ高校は魔境だと思われたが、強ち間違いでは無い。
さて、話を戻すがクラスメイト達は、天空城カナタが?橋先生にどんな返しをするか手に汗を握った。
クラスメイト達にとって熊と猟師、警察とマフィアが互いに出会った場面に遭遇したようなである。
それに対してカナタは、
「あ、そうですね。わかめ高校とは違いますし、すみません」
そう言って、肩の物体とヒゲを外して鞄にしまった。
同時に、クラスメイト達が再び心を一つにして、えっ⊠素直に外すの!?と内心ツッコミを入れている。
この時肩に付けていた物体が小さくなり、あれ程自己主張していたアホ毛が肩の物体を外した瞬間にペタンと元の髪に紛れたのを教室にいたカナタを除く全員が目撃した。
?橋先生と大多数の生徒は肩の物体は最新のテクノロジーでできた何かで、アホ毛は風が吹いていたからだろうと思い、残りの一部の生徒はオカルトじみたナニカだと思う

が授業が始まると直ぐに意識を切り替える。
この時皆はこう考えるべきだった、何故わかめ高校では肩の物体を付けて良かったのかと。

数分後

朝からヒゲと肩におかしな物体を付けているのが、急に普通の学ラン姿に戻ったので最初は違和感を覚えていたのだが、数分も経てば授業に集中し始めていた。
が、そんな時、クラスのマドンナである白崎香織の頭部にピン！とアホ毛が立ったのだ。
それに一番初めに気づいたのは？橋先生で、それはもう見事な二度見であり、二回目のギョ！はギャグのよう、それに釣られて皆気付き始め、ようやく本人が気付いて驚きの声を上げる……前にアホ毛が消える。
ほっと、一安心という空気が広がるかと思いきや、今度は別な人の頭部にアホ毛が立つ。
当然ながら教室はざわめきだすがこれに注意を促す者がいた。

「みんなどうしたの？授業中だけど」
元凶（仮）であるカナタであった。
これには？橋先生とクラスメイト達はツッコミを入れようとしたがここで空気が読めないことに定評がある天之河が、
「天空城くんの言う通り、みんな授業に集中しよう！」
アホ毛がまだ風か物理的な何かの所為だと思っているのでそんなことを言う。
すると、クラスカーストのトップの言うことなら、とみんな言いたいことはあったのだが授業に戻る。
そして、こうなったのだ。
これは授業が終了して、カナタが謎の物体（カナタ曰く、チャームポイント予備）を付けるまで続き、この事件以来学校では授業中にチャームポイント予備を付けていても何も言わないという暗黙のルールができたのである。
ついでにヒゲも。

第三話

ある日、とある高校であるクラスが異世界召喚された。
異世界召喚、それは文字通り異世界に召喚されること。
それは当然ながらオカルトじみた、この場合はファンタジーのような体験であり、まずこのような経験した人間は普通いない。
だが、異世界召喚された側の大多数、つまり今回の場合、生徒たちはそんな理解不能な出来事を体験したにもかかわらず、ほぼいつも通りの反応……まあ、落ちついていたとも、またかよ、という諦めにも似た様子で、とてもパニックに陥っている様子には見えずどこかこのような意味不明な現象（出来事）に慣れているようだった。
それもその筈、ヒゲと肩に変な物体を付けた格好で転校して、その後セクシーコマンドー部（通称ヒゲ部）を設立したり、肩の変な物体（チャームポイント予備）を外せばオカルトともファンタジーとも言い難い超常現象（アホ毛の移動）が起きたり、その所為で今まで普通だったクラスメイトが急にキャラが濃くなっていたりなど、事件（例）を挙げれば限がない。
そんな訳で召喚直後に本人を除くほとんどの生徒が思った。
（（ああ、また天空城（カナタ）（くん）が元凶（原因）か））

内心ではそう思うが口に出さない、口に出したら出したで話がこじれて余計に疲れるからだ、しかしながら、せめてもの抵抗として見事なジト目を向けていた。
実際には冤罪なのだが、今までの経験上そう思うのも仕方ないだろう。
誰かが何か話そうと口を開こうとしたがその場にいた一番偉そうな老人が一歩前に出てきた。
「コホン、よろしいですかな。ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシュタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」
((あ、すっかり忘れてた))
カナタは、この感じはなんか中学時代以来だな、と思っていた。
そして、妙にヒゲのクオリティがいいな、とも周りを見て感じていた。

◇

豪華で広いと素人のような感想がそのまま当てはまる大広間にカナタたちは案内される間、カナタは途中何度もまるで奇妙なモノを見る視線を感じた。

同じセクシーコマンドー部の部員達や他の生徒たちに向ける視線とは全く異なるもので、一度なっくんや他の部員にこっそりとその様な旨の事を話したが、気にしなくてもその内無くなるよ、とやけに実感の籠った言葉を貰い渋々納得する。

一体どういうことなんだ、と思いながらヒゲを変えながら移動するのであった。

全員が着席するとメイドが入って来た。

それを見るや否やクラスメイト達がビクッと肩を揺らし、更に美女・美少女メイドだと分かるとまるで神話生物でも相手にするかのように警戒する。

メイドたちは困惑した、えっ？なんで私たちそんな警戒されているの？と、普通だと男の邪な視線を向けられていたのだがこのように危険生物を相手にするかのように警戒されることはなかった。

あるメイドは偶然にもこんな言葉を聞き取る。

「大丈夫だよ、なっくん。少なくてもこのメイドさんたちの中身は人間だから」

少なくても中身が人間ってなんだ

言葉の意味を理解する間も無く、次の言葉が続く。

「いや、そう言ってマドカさんがあれだったじゃないか!?」

「え、でも四割ぐらいのメイドは中身が人間で容姿がいいとアレだよ。残りの六割だって……まあ、色々」

「何その不安を煽る色々は凄く怖いんだけど?!」
「今も昔も本職で容姿がいいメイドは基本アレだから」
「……現実は無情だね」
この会話は他のメイドたちにも聞こえたらしく、何人かは表情に現れるほど動揺していた。
今気が付いたが召喚された女子陣からは恐怖、憐み、同情のといった視線が向けられている。
そんな感じで飲み物が行き渡るとイシュタルが話し始めた。
つまりは人間族と魔人族が長い間戦争をしていたが、魔人族が何らかの手段でパワーアップ、なのでこちらも対抗策として勇者召喚を行ったのか、カナタはイシュタルの長々とした話をこのようにまとめた。
不意に中学時代にマサル師匠や他のセクシーメイトたちと共に巻き込まれた事を思い出す、正体不明の存在が多数の異世界から何かしらのエキスパートたちを集めてその力を奪おうとした事件。
黒幕は僅か数分で倒されたけど帰還方法に手間取って結局一ヶ月ほどかかった。
その事件で出会った人たちに革命家や冒険家、ボディビルダー、メイド……
とにかく色んな人が「おい」いたけど「おい!」今何しているのだろうか。

「おい!!」
「ん？何どうしたの」
何故か青筋を立てた天之河くんがいた。
周りも何故か苛立った人、ジト目を向けている人が多く、一体どうしたというのだろうか。
すると、
「話を聴いていなかったのか?!」
「あ、何か話していたのかい？ごめんごめん、つい考え事をしていてね」
「？気なことだな、どうせヒゲかセクシーコマンドーのことでも考えていたのだろう？」
口元を引きつらせながら言う天之河くん、セクシーコマンドー部を設立してから妙に話しかけてくるようになったのだが、セクシーコマンドー部に遠まわしに入りたいのだろうか思っていて、この前はっきりとそう訊いたが違うと言われたので、なんで話しかけて来るのか、その答えが最近ようやく分かった。
ヒゲについて語り合いたかったのだ。
部員たちと同じヒゲをプレゼントしたらやや嬉しそうに受け取っていたし、なんか分からないけどなっくん、ユッキー、マイケル、サッキー、ルイルイも同じものを持っていると言ったら見るからに顔色変ったからなあ。

「いや、全然。そろそろ帰るの？もうとっくに昼休み終わっているし。数学の？橋先生も異世界召喚されていましたって言えばそんなに怒られないでしょ、なんだかんだいってあの先生チャームポイント予備についてとか一番に理解してくれたからね」
「……本当に何も聴いていなかったんだな」
「まあ、うん」
「帰れないんだよ」
「はい？」
「だから！帰れるためには、世界を、みんなを救うためには戦うしかないんだ!!」
そう叫ぶように言う天之河くん。
「なんでそうなるの、チャームポイント予備を使えば時間は少しかかるけど帰れるよ」
「「……えっ？」」
「えっ、何知らなかったの？」
「「知るか――――!?」」
一気にその場が混沌となる。
当たり前だ、帰れないと思っていた矢先に帰還できる希望が出てきたのだ。
それがオカルト、ＳＦ、ファンタジーが合成されたビックリ人間といっても過言ではない天空城カナタから出てきた『帰れる』という言葉は、そこはかとなく不安を感じる

がみんなは不思議と信頼できた。
「しかし、それは本当にできるのですか」
　だが、冷や水をかける者がいた。
　イシュタル・ランゴバルドである、それもそうだろう折角扱いやすそうな戦力を召喚した（厳密にはエヒトらしい）のにさっさと帰られてはさぞかし困るだろう。
「今からでもできるけど、誰から帰る？」
「お、俺から」
「あ！ずるいぞ」
「わ、わたしも！」
　次々と手を挙げてカナタに押し寄せる何人かの生徒たち、いきなり戦争なんて実感が湧かないし、当然ながら不安に陥っていたので一刻も早く帰りたいのだろう。
「えっと、取り敢えずそこの四人はその場を動かないように」
　適当な男子四名をカナタは選び、その場を動かないように指示を出して何かいかにもそれらしい魔法陣を描く。
「えーと、確かこれがこうでアレだったはず……あっ、違うこれはこのマークだった」
　どこからか取り出したメモ用紙を見ながら

もう誰も何も言わない、というよりはこれくらいでは動じなくなったというべきか、まあ、現地の異世界の人たちは、どこからメモを出したんだ？と疑問に思っているが。

なっくんは少し気になってメモを覗き込んだが、明らかにカナタの字では無く別の人がかいたものだな、そして右下にカナタがよく描くヒゲのマークとは別のものが描いてあるから、多分カナタの同類が描いたんだなと思う。

少し時間は掛かったが魔法陣は完成、するとカナタは聞いたこともない言語で呪文らしいことを唱える。

……魔法陣に変化は起きない

「やはり、失敗ですかな」

イシュタルは嫌味のようにそう言うが、誰も反応していない。

いや違う、正確にはカナタが肩に付けているチャームポイント予備と呼ばれる不思議な物体を注視していた。

それはなんか物凄い光を発していたのだ

言葉では表せないとても不思議な光、それは明らかにエネルギーをチャージするかのように高まって……その場でとどまっていた四人に二本の極大ビームが発射された

「「え――――――――??!!」」

その二本のビームはまるでアニメの合体攻撃のように一つのビームとなって、硬直している帰還予定の四人を何の反応も許さないかのように？み込んでしまった。
「いやいやいやいや、カナタくん何やっている?!」
「どうしたなっくん、そんなに慌てて」
「どうしたじゃないよ！何あのロボットアニメでも中々無い、いかにも必殺技的なビームは?!」
「何って、アレが帰還だけど」
「アレ(ビーム)が?!」
「アレ(ビーム)が」
「なんか当たった場所が焦げてプスプス音を立てているけど?!」
「大丈夫、大丈夫。演出だから」
あははは、と笑うカナタを見てクラスメイト達は
(((物凄い不安だ)))
久しぶりに強烈なものを見たクラスメイト達はちょっと遠慮したいなと思った。
「ふむ、しかしながら本当に帰還できたのでしょうか」
やはりというべきか、またしてもイシュタルが嫌味ったらしく言うが魔法とかがある異世界においても意味不明な現象を見て頬を引きつらせている。

その様子を見て、頑張るなあ、とクラスメイト達は思う。
「確かにそう思う人もいるか、よし」
その場にいた全員がその掛け声に嫌な予感がした。
またもやカナタが聞いたこともない言語で呪文らしいことを唱える。
突如、震える空間、現れる巨大な暗黒の球体、場に走る緊張……球体に輝が入り、時間とともに輝が大きくなっていく。
そして、暗黒の球体から……数学の？橋先生が現れた。
「「……」」
「えっと、ここは一体どこですか」
「？橋先生、向こうに送った四人はどうですか」
「ああ、また天空城くんの仕業ですか。教室に着いても誰もいないと思ったら急にどこからか檜山くんたちが現れて……」
「四人とも無事ですか」
「まあ、無事ですが、そんなことより…（シュバッ）」
一瞬チャームポイント予備が光って？橋先生が消えた。
カナタはいかにも、やり切ったぜ！みたいな感じの雰囲気を出していたが、沈黙が場を支配する。

「ふっ、これで帰還方法の安全性が証明されたね」
「「……」」
「ん？反応が無いな」
「「……」」
「えっ？何この空気、一体誰の所為だ?!」
「「お前だよ!!!」」
綺麗にシンクロしたツッコミが広間に響き渡った。

第四話

カナタ達は、聖教教会本山がある【神山】から麓の【ハイリヒ王国】に移動中である。
えっ？さっさと帰還したんじゃないの？……それには訳がありまして。
ちょっとその場合に移りたいと思います。

「「一週間?!」」
「うん、ここにいる全員を帰還させたり、あとは伊吹さん達を呼んだりするためのエネルギーチャージに最短で一週間が必要かな。トータスの問題は伊吹さん達に解決してもらおう。この手の問題は普通専門家や大人がすることだし」
「まあ、普通そうよね。カナタの言う伊吹さん達は知らないけど、私たち学生が数十名よりも自衛隊の方が明らかに強いもの」
「ルイルイが言った自衛隊の他にも僕のセクシーコマンドーの師匠である花中島マサル師匠もお呼びする予定だから安心していいよ」
((さ、最後の人はとても不安だ))

「知り合いの宇宙人みたいな科学者の人達にチャームポイント予備の座標データを渡せばすぐにでも地球とトータスを繋ぐことが可能だからかなり早めに元の日常に戻れるね」
「一週間かぁ……その分の授業どうなるのかな」
「絶対休みが削られて補講がはいるでしょ」
「この時期はお店の厨房が忙しく人手不足なのに」
　みなざわざわと喋っているが、最初と違いその内容は日常に戻った時のことを想像したもので、笑顔で話していた。
　いつもなら、「みんな静かにしてください!」と可愛らしく注意する畑山先生でさえも、ほっとしていている。
　しかし、トータスで一週間どうしようか、というようになったが元々予定していたようにハイリヒ王国で受け入れるという運びになった。
　そんな感じで、ファンタジーなパワーで移動中であったが、ふとある生徒がカナタに話してかける。
「おい、部長さっきのもそうだが、そのチャームポイント予備って一体なんだ?」
「急にどうしたユッキー」
「せめて清水って呼べ……」

ユッキー（清水）は疲れたようにツッコミを入れる、その様子から同じようなことを何度も繰り返していたことがわかるだろう。

なっくんがそっと肩を叩いて慰めるまでがワンセット。

「ま、まあ、清水くんの言う通りカナタくんが肩に付けている謎の「チャームポイント予備」…チャームポイント予備はかなりの機能が付いて他にどんな機能があるか気になるなぁ」

「俺はその物体の正体が最初から気になっていたからな、いい機会だから全部してくれるよな部長」

「ふむ、まあ、別にいいか、大したことでもないからね」

カナタは、セクシーコマンドー部と叫ぶとカナタの周りには部長であるカナタを除き五名の生徒が集合する。

元々チャームポイント予備が気になっていたのか聞き耳を立てていたらしく、特に説明することも無く、カナタはチャームポイント予備について話始めた。

「このチャームポイント予備は元々僕のセクシーコマンドーの師、さっき話にも出したと思う花中島マサル師匠の持ち物だったんだ」

「まさか、その師匠も……」

「勘がいいね、マイケル。師匠もチャームポイントを付けているよ、最もチャームポイン

ト予備のように多種多様な機能は付いていないけど」
「つまり、いくつかは何かしらの機能が付いていると？」
「サッキーの言うのとはちょっと違うかな、せいぜい、非常に重い、付けると髪が伸びるとかぐらいだよ」
「せいぜいとは一体？」
「元々、予備ということで師匠からのプレゼントされた時点ではチャームポイントと同じものだったけどね。今みたいな感じになった切っ掛けは小学生二年生のときに師匠たちと行ったアメリカ旅行で起こった事件。思えばその事件でアメリカのマイケルと知り合いになったんだっけ」
「今更だけど何で俺はマイケルって呼ばれているんだ？」
「マイケルのニンジャを思わせるような華麗な隠密格闘技で敵を倒した話とか色々あって長くなりそうだから事件の詳細は省くけど、チャームポイント予備が一度敵の魔術師手に渡ってしまい改造が施されてしまったんだ」
「超気になる、マイケルって何者？もしかして暗殺者？もしかしなくても俺の渾名って、それが由来？」
「今更だけど部長の人脈がスゴイ」
「私的には魔術師というワードが出てきたのに驚かない自分にビックリしたわ」

「えっと、南雲くんはどう思うかな」
「僕は、魔術師が何に興味を示したのかが知りたいなぁ」
「ああ、何でも『これは魔術的、科学的にも……』って感じなことを言っていたよ。恥ずかしながらそこで気絶してしまってね」
((魔術師でさえも興味を引く謎の物体、本当になんだチャームポイント予備))
いつの間にか全員が耳を傾けてカナタのチャームポイント予備の経歴?を聴いていた。
さて、続きを話そうとカナタが口を開きかけたが閉じて、
「どうやらもう着くようだ」
そう言われて意識を外に向けるとカナタの言う通りもう着く寸前であった、思いの外チャームポイント予備のことについて聞き入ってしまったこと、移動速度が速かったこともあって、あっという間に目的地に到着した。
また今度に話そう、と話はお預けとなったのだ。

◇

翌日

身分証明書代わりにステータスプレートを貰うことになり、早速集まった生徒達に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。

そして、騎士団長メルド・ロギンスが直々に説明を行った、理由として対外的にも対内的にもすぐに帰還するとは言え〝勇者様一行〟を半端な者に預けるわけにはいかないということと、次にやって来る来訪者に対してのアピール、この世界来て得た力を確認するためには半端な力量では双方の安全性が損なわれるなどがあったからだ。

スマートフォンよりやや小さい感じのプレートを見て、生徒達はちょっと物足りなそう、もしくは意外そうな顔をしていたが、お察しの通り大体カナタの所為で感覚が麻痺していたからである。

不思議な物体＝可笑しな物という等式が成り立っている彼らにとって、普通の不思議な物は未知のもので、人によっては、もしかしたら副作用が……、爆発が……、などと警戒していた。

そんな様子を見たメルドは、一体どんな生活をしていたらそんな反応を……と控えに言って引いていたが気を引き締めて大声で言う。

「大丈夫！何百年も使われてなんの異常も確認されていないから安心してくれ！」

そう言われて使用を躊躇っていた生徒達（特にカナタを除くセクシーコマンドー部の部員）はステータスプレートを起動させる。

なんとなく不安を感じながらも、なっくんは恐る恐るステータスプレートの表示を見た。

すると…………

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

南雲ハジメ　１７歳　男　レベル：1
天職：錬成師（＋セクシーコマンドー）
筋力：３０
体力：３０
耐性：６０
敏捷：３０
魔力：１０
魔耐：１０
技能：錬成・言語理解・ヒゲ（四級）・セクシーコマンドー

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

（……いや、絶対これは違うだろ）

思わず別人格になってしまうほど、なっくんは驚いていた。

が、すぐさま冷静になって周りを見渡して、同じような反応をしていた生徒達を確認する。

そして、バッ！と手を挙げて

「集合！」

と合図を出す。

ササッとなっくんを除いて四人の生徒、いいや四人のセクシーコマンドー部の部員（マネージャーを含む）が即座に集まった。

紹介しよう！

セクシーコマンドー部部員第一号にして副部長の南雲ハジメのことなっくん、基本ツッコミだ。

部員第二号！清水幸利、渾名はユッキー、カナタの熱意（しつこい勧誘）に負けて入部。

部員第三号！遠藤浩介、渾名は日本版マイケル（だけど長いから普段はマイケル）、セクシーコマンドーを始めれば、影が薄くて無視されることは無くなるよ、と言われたのが切っ掛けだ。

セクシーコマンドー部のマネージャー、白崎香織のサッキー、動機は思い人と部活できるから。
同じくマネージャーの八重樫雫のルイルイ、実はセクシーコマンドーとカナタに因縁があるらしい、動機はサッキーが心配なので。
そして、部長にご存知である天空城カナタ、元の世界に一年生が一人の計七名がセクシーコマンドー部に所属しているのだ。
副部長のなっくんがおもむろに口を開き、他の四人に話しかける。
「言いたいことは分かるよね」
「ああ、ステータスプレートのことだよな」
「やっぱり南雲や清水もそうだったか。マネージャー組は？」
「えっと、私はその、技能にヒゲ（初段）があったの」
「私も香織ほどでは無いけど技能にヒゲがあったわ、ちなみに三級」
「ん？マネージャー組はヒゲだけか？」
「そうだけど、男子はそれ以外に何かあったの？もしかして技能にヒゲだけじゃなくてセクシーコマンドーもあったりして」
「「……」」
「えっと、まさか本当に」

目線を合わせない男子部員達を見てルイルイは察した、あっ、これはマジの奴だ、と。
しばらくして、そっと五人は互いの情報（ステータスプレート）を公開して話し合う。
「男子は筋力、体力、耐性が高いな。……後は天職の後ろに（＋セクシーコマンドー）、技能にヒゲ（□級ｏｒ□段）とセクシーコマンドー。訳が分からん、南雲や清水はこういう事には詳しいだろ」
「何とも言えないかな、少なくても天職の後ろはサブ職業でないと思うけど」
「ああ、確かに。まあ、筋力、体力、耐性が高いのは何気に部活で鍛えられているからだろ。マネージャー組も耐性が高かったから、いつもの部長のアレとかで耐性がついたんだろ」
「「確かに」」
「そう言えば天空城くんが持って来た少女漫画にヒゲがよくでてきたような」
「作者は…モエモエだったかしら。……そういえば転校して来た時に言っていたわかめ高校の卒業生だったような」
「あーうん、そういえばカナタくんはどうしたんだろう」
なっくんは話題を逸らした。
そこを突っ込まれると、ただでさえ不味い評判が今以上に悪化する思ったからだ。
だが、なっくんは知らない、そんなものカナタが転生して来た昼休みの時点で言い訳

できないレベルになっていることに。
しかし、話題を逸らした本人であるなっくんもおかしいことに気付く、いつもなら騒がしいあの天空城カナタが真剣に自身のものと思われるステータスプレートをジッと見つめて動いていなかったのだ。
一体どうしたというのだろうか？

余談
晩餐会後のこと
話題は殿下がサッキーに振られた件について

「なっくん、あれは悲しい事件だったね」
「振られた理由がヒゲに理解がないとか悲しすぎる」
「ここはヒゲについて学べる環境ではなく、それが不幸なことに敗因に繋がった」

「……（単に好きな人がいるからだと諦めなさそうだったからヒゲに理解がないからって断っただけなんだけど）」

「……（カナタくん、白崎さんが本気で言っていたと思っているようだけど、たぶん違うでしょ……違うよね？本当にヒゲに嵌った訳ではないよね？）」

第五話

前回のあらすじ

なっくん達は身分証明書代わりにステータスプレートというアーティファクトを手に入れた。

しかし、いつものように不思議なことが起こり、セクシーコマンドー部の部員達と頭を悩ませていたのだがそこに部長であるカナタは無かったのである。

そこになっくんを先頭に、ステータスプレートを覗き込んだまま動かないカナタに近づいた。

ある程度近づかれたところで、セクシーコマンドー部の部員達の接近にカナタは気づく。

「ん？みんな集まって、どうかしたのかい」

「どうしたって、ついさっきまでお互いのステータスプレートを見せ合っていたんだけど、いつもならいるはずのカナタくんが居なかったから探したらステータスプレートを見たまま動かないでいたからどうしたのかなって」

なっくんがそう言うとカナタはバツが悪そうにやや顔を逸らして歯切れが悪そうに、
「僕のステータスプレートがちょっと変でね」
部長だけ集合していなくてごめんね、というカナタの様子になっくん達は意外に思った。
そういえばステータスプレートを覗き込んでいたとき今まで見たことのないほど真剣な表情だったな、と今更ながら気づく。
「みんなのステータスプレートは一体どうだったのかな。ちょっと見せてくれないか？」
「いいけど、後で部長のも見せてくれよ」
「ああ、勿論だとも」
そう言うとカナタは五人分のステータスプレートを見せてもらい、しばらくして納得したよう表情になった。
「ああ、なるほど」
「何がなるほど、なんだカナタ」
「ふふ、単にステータスプレートの仕組み…というよりは何が基準となって天職、技能がステータスプレートに表れるのか、についてだよ、マイケル」
部員達が驚く様子を見ながらカナタは語りだす。

「まずおかしいと感じたのはなっくんのステータスプレートを見たときだ」
「僕の？」
「そう、まずは技能にプログラミング、作画といったプログラマーや漫画家に関係する技能が無かったことだ。それらに関して明らかに高校生レベル以上の技術を持つなっくんがステータスプレートに一つも表示されない、別の何かに置き換えられた技能があっていいのにね」
「あ！」
「確かに」
「後は天職について。これについてはみんな察していると思うけどこの世界にある、または認知されている職業からしか選ばれない」
「私もそれはなんとなく感じていたよ」
「まあ、ファンタジーの世界に機械があったら不自然だよな」
「メルド騎士団長が言っていたが技能＝才能というのは普通に考えておかしくないか？戦闘の才能と生産の才能を持っていたらどうなんだ？まだ自分のものを含めて六人分のステータスプレートを見ていないけど、恐らくどちらかに偏っていると思うよ」
「「……」」
「それも天職に関係しない技能は恐らく表示されていない。周りからちらほら戦闘系の

天職が聞こえてきたり、この中のほとんどが戦闘に関する天職、これはきっと召喚時に大きな補正が掛かったと僕は考える」

「……カナタ、貴方は結局何を言いたいの？」

「本当はもっと話を続けたかったけど、ルイルイの言う通り長くなりそうだし、手短に言おう……この世界はエヒトという神の遊技場だという可能性が高い」

カナタは最後の言葉をセクシーコマンドー部にだけ聞こえるように小さな声で言った。

なっくん、ユッキー、マイケル、サッキー、ルイルイは自分の耳を疑いながらもカナタの一言に納得していた。

みんな少なくてもこの世界のことをこう思っていたのだ、

この世界はまるでゲームのようだ

急に無機質を見るような視線を幻視して得体の知れない恐怖を感じるが、誰一人取り乱すことも無く。

カナタに視線を向けてアイコンタクトを送る、それでどうすればいいのか、と。

「一番可能性が高いのはお、ゴホン、僕が分断されること」

「部長が魔人族に人知れず暗殺されたなんてことになれば、帰還はできないし、復讐とかで理由付けして戦争に参加させて一石二鳥だろうな」

「これでも修羅場を何度もくぐり抜けているから安心していいよ。二番目は人質だけどこれはほぼ大丈夫、仮にも〝勇者様一行〟には手出しはしない、教会の力が大きいからね」

「……万が一、攫われたりしたらどうする？狙われる確率が高いのはここにいる五人だぞ」

「みんなヒゲは持っているな？そのヒゲを持っていれば大体の方角は勘で分かる」

（（（いや絶対頭のアホ毛レーダーだろ））））

カナタ（本人）は自覚していないが十中八九、例のアホ毛がレーダーのような役割をしていて目的のものを発見、他には何か色々な電波を受信する。

部員達の心情に全く気づかず、話を続けようとするが雰囲気がガラリと変わった。

「よく聞いてくれ、まず無いと思っているけど、起こったら最悪の場合のことを」

「さ、最悪？」

話の流れから相当なことだと思い、一言も聞き逃さないようにカナタに注目する。

「それは……」

◇

ステータスプレートの出来事からしばらくして、戦闘訓練を行う時間となった。
教師である畑山先生は最初、難色を示していたが、すぐに帰還するということもあって護身術のようなものだ、と納得している。
戦闘訓練が始まり、一部の武道経験者以外はメルドに手も足もでない、その一部の武道経験者もいかに恵まれていても（優秀な技能などを持っていたとしても）経験の差で現在二人の生徒以外負けてしまった。
一人はルイルイのこと八重樫雫（やえがししずく）、最近長年の悩みから解放されて重荷がなくなったからか、急成長を遂げている。
そんな彼女は引き分けに終わった、しかしあくまでこれは訓練であり決闘でもない、どれだけの実力があってそれがこの世界においてどれほど通じるかを確認するためだ、双方それがよく分かっていたからこそ無駄な怪我などをしないように引き分けで終わらせたのだ。
もう一人だが、その生徒は天之河光輝（あまのがわこうき）、天職：勇者であった。
そして、勝敗は彼、天之河光輝の勝利。
これはメルドが油断していたことと、天之河が単純に強かったということで大体の説明がついてしまう。
まずはメルドの油断についてだが、メルドは天之河の前に何人か相手にしていて、勇

者一行の大体力量を見極めていたつもりであった。
その見極めは正確であった、しかし、その枠に天之河の力量は収まらないどころか、大幅に越えるものであったのだ。
天之河が単純に強かった、ステータスも確かに全ステータスは２００はレベル１では破格ではあるが、まだメルドのステータスの方が高かった。
メルドが予想外だったのはステータスに表示されることのない技量と執念、子供でありながら自身を大きく上回る剣技と何が原因かは不明だが絶対に勝利するという執念に圧倒されてメルドは負けたのだ。
最初から本気で勝負してもメルドの勝率はおおよそ五割あったら良い方だろう。
その後のルイルイとの訓練では気を引き締めて本気で当たり、引き分けに終わる。
現在、戦闘訓練も残るはあと一人、天空城カナタを残すのみとなった。

（ついにこいつ（カナタ）の番か）
メルドは内心で呟きながら、意味がないと分かっていながらもカナタのステータスプレートの情報を思い出す。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
天空城カナタ　１７歳　男　レベル：１
天職：セクシーコマンドー
筋力：３０
体力：３０
耐性：６０
敏捷：４０
魔力：９０
魔耐：７０
技能：セクシーコマンドー・言語理解・ヒゲ（十段）
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
天空城カナタ　１７歳　男　レベル：１
天職：セクシーコマンドー
筋力：１０
体力：４０

耐性：８０
敏捷：９０
魔力：２０
魔耐：５０
技能：セクシーコマンドー・言語理解・ヒゲ（十段）
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
天空城カナタ　１７歳　男　レベル：１
天職：セクシーコマンドー
筋力：５０
体力：９０
耐性：６０
敏捷：６０
魔力：４０
魔耐：９０
技能：セクシーコマンドー・言語理解・ヒゲ（十段）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

（ステータスが常に変動するってのは、厄介極まりないな。どう加減したらいいのか分からないな）

そう、カナタのステータスは常に変動していて、正確な値を知ることが出来なかったのだ。

カナタの順番が最後になっていたのは、生徒達の力量を見極めてから当たった方が事故などのリスクが避けられるという考えもあったからである。

………そして、何よりカナタの天職と二つの技能を持っていることが恐ろしかった。

「もうそろそろ始めようか」

「こっちは準備ＯＫですよ」

二人の言葉を聞いて審判が、始め！と合図を出す。

先に動いたのは………カナタであった、最初にギラッ！と目を輝かせてから一気に全身を輝かせた。

恐らく相対しているメルドは光で視界を潰されただろう。

「先に仕掛けたのは部長か」

「あれはえーと、『真夏のサンライトフラッシュ』だっけ？」
「ああ、カナタが考案したって言う、セクシーコマンドー改だな。源流の『はじらいのひととき』や『夏★しちゃってるＢｏｙ』を改良したもの…だった気がする」
「……なんか俺たちこういう、どうでいいことばっかり何故か覚えているよな」
「これはもうカナタの勝ち…え？」
「「はぁ?!」」
カナタが発光による目潰しでメルドの視界を奪い位置をつかませないように素早く走りながらフェイントを織り交ぜながら接近、サッカーのフェイントが一番近いのかもしれない、ルイルイはかつて自分も同じ手に見事に嵌ってしまいカナタに破れた経験から、これは決まったと思い、口に出して……唖然とした。
何も見えないはずのメルドがカナタにカウンターを決めていたのだ。
観客に回っている誰よりもルイルイは驚いていた、第一にサッカーのフェイントに対処するとは違い視覚が使えない、第二に雑音（雑音）が多い、これによりどこからか攻撃がくるのかはっきりと分からない、勿論カナタはこれを意図的に行っている。
最後に完全に不意打ちが成功すれば人は動揺する、なので攻撃に反応はまずできない。
しかし、現実ではメルドはカウンターに成功して、カナタは地面に叩きつけられてい

た。

一体何故か、観客席が混乱に陥っていると、バタンと一瞬目を離した隙に今度はメルドが地面に伏していたのだ、その側に立っていたのは倒れたはずのカナタであったのだ。